

村野藤吾記念会

Togo Murano Committee

第20回村野藤吾賞

設計者 菅 順二（竹中工務店）

作品名 竹中工務店東京本店新社屋

戦後5年頃、復興・再建の力を手にしはじめた時、世に大きな注目を集めた一つの建築、日活国際会館が日比谷の交差点に竣工した。それには、1951年の日本建築学会の第3回目の作品賞が贈られた。受賞者は竹中工務店設計部長小林利助氏であった。地下室の全てを地上で造り、それを潜函する新しい工法により建設した。そしてそれは、当時の北欧建築を想わせる壁面と大きなガラス窓の軽やかな大建築であり、戦後の都心に青く明るい風を呼んだ。

その地から搬出された大量の土は、洲崎の社有地に運ばれてその地盤の嵩上げに利用し、そこに今日の竹中工務店東京本店新社屋が建設されることになったと聞く。

1950年頃の東京の地図では、“東陽”という地名を見出すことができない。当時都電の最東端は錦糸町であった。そこを直角に折れて南下する電車には洲崎行という行先板が掲げられていた。

江戸、東京の都市の歴史は重ね重ねの水事業の歴史であった。上下水利、河川の瀬替、東京湾への陸地拡張の連続であったといえよう。その技術と手法により、当時のロンドンやパリを凌ぐ清潔な中世都市として、高いレベルの文化が育まれた。かつては日比谷も海と陸の接線に近い地点であったにちがいない。1950年代に地上に建ち上がった日活国際会館も、江戸、東京のその宿命の上にあらわれた技術と建築の新風であったとも思う。

今回村野藤吾賞の受賞が決定したこの建築は、東京湾の北端の水面に拡がりつづける陸と海の接点に建つ。東陽という町名は1960年代にその地に与えられた。いま、東京の都心は地価上昇の前提の上にさらなる利潤を地中からくみあげることが目的とするが如く、超高層の塔で埋めつくされようとしている。

今回の新社屋は、この東陽の地に若々しい新鮮な優しい風を吹き込んだ。半世紀前の日比谷での建設工事残土により嵩上げて維持した所有地であるがために可能であったのであろうか、平面積の大きな7層の中層建てとし、各階4000㎡を超える知的生産性の高いオフィス空間をつくり上げている。そして、いま世の大きなテーマのひとつである環境負荷低減の視座に立つ創造の数々を建築界に示してくれた。

コアシステムから開放された内部の大空間に、ここで創造的時間を持つ個々人のFace to Faceのインタラクティブな関係環境を生みだし、さらに中央の3本の大きな光のシャフトから100年前からの運河を北上する季節と時間に生きる光と風を流し込み、雨も雪もそのシャフトに舞い込ませている。

この建築を訪ねたとき、設計担当者の案内を受けることとなった。その順路は外周をめぐることから始まった。スーツにネクタイという姿での丁寧な説明を受けた。この建築の特色である外殻構造の発想とそのプレキャスト・コンクリート壁、開口、等……細部にわたり周辺の風景対応を静かに語り続けるのであった。そして、その語る目には“ものづくり者”としての熱い光を見た。

村野藤吾記念会 代表 池原義郎